

親切ねずみ

むかーしと行って、それほど古いお話ではあ
りません。尾張平野の北を流れる木曾川沿いに、
鹿子島かのこじま 江南市鹿子島こうなんしかのこじま という小さな部落があり
ました。

前も後まえ しろも土手にはばまれたこの鹿子島は、ちよ
つと大雨が降ると木曾川の水がしみ出し、少ない
田んぼはもちろんのこと、畑までが水につかり、
農作物がとれなくなるのがしばしばで、しかたな
く男は行商おとこ ぎやうしように出かけ、女は手機おんな てばたなどをおつて、
貧しいくらしを支えておりました。

ある年の秋のことです。その年は天候に恵まれ、
麦も野菜も米までも豊作でしたので、ささやかな
がらも村祭りをするようになりました。

長老連中が部落の宝ともいうべき覚書
帳を見ようと、鎮守様の生島神社に集まりまし
たが、その覚書帳がいつの間になくなってい
て、大へんなさわぎとなりました。社の中をはじ
めとして広い境内まで、草の根を分けてさがしま
したが見あたりません。みんなでひたいを集め、そ
れぞれの記憶をもとに話し合いましたが、どうして
もわからないのです。なかには責任を感じて、家へ
帰ってから病気になる、寝こんでしまった老人も
おりました。

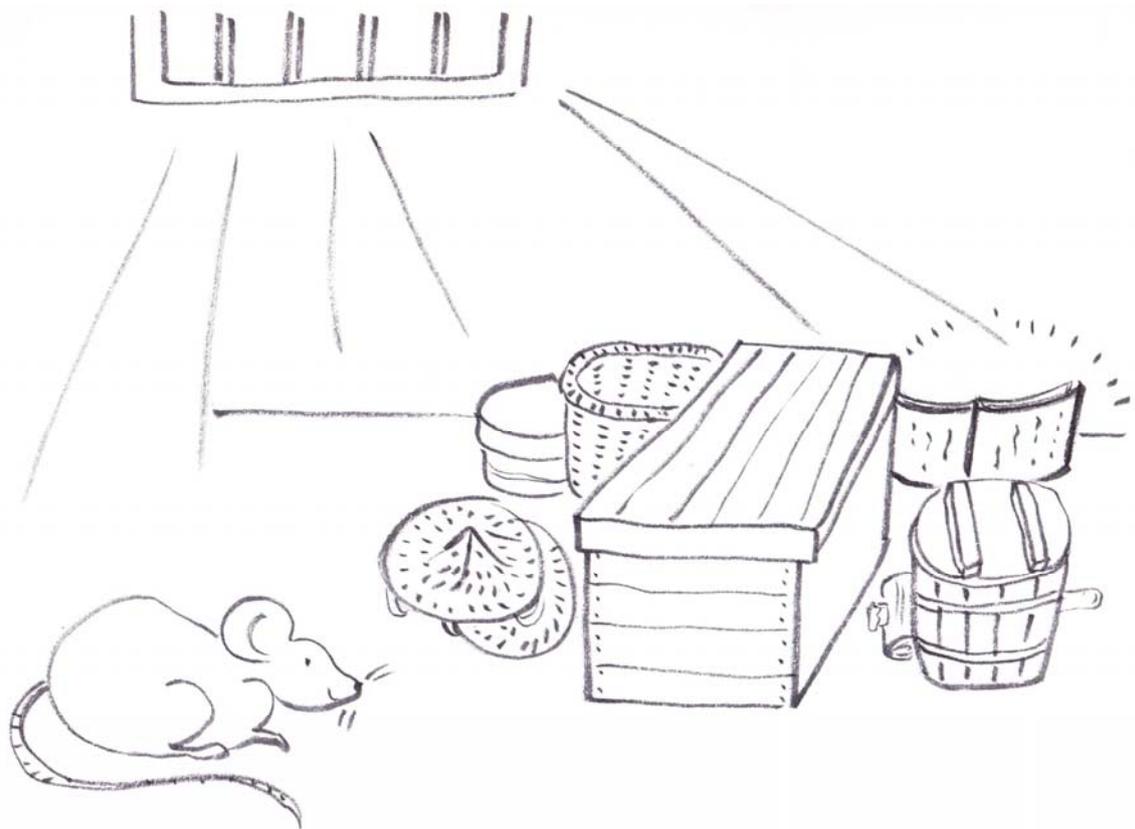
長老連の一人で裏の土手近くに、仙五郎とい



う頭あたまのはげたおじいさんが住すんでおりました。
 部落ぶらくの人ひとたちは少すこしあわてものだが、気きのやさし
 いほねおり好きずのこのおじいさんを仙せんじいさんと
 呼よび、子こどもたちから大たいへん親したしまれておりま
 した。

覚書帳おぼえがきちょうがなくなつて、五いつか日あさほどたつた朝あさのこ
 とです。仙せんじいさんが祭まつり道具どうぐを調しらべておごうと、
 郷藏ごうざうをあけて中なかへはいろうとしたとき、サツとさ
 しこむ光ひかりの中なかでねずみが一いっぴき匹ちい、小ちいさな眼めをシヨ
 ボシヨボさせながら、仙せんじいさんの顔かおを見みつめて
 おります。とてもかわいい眼めをした利巧りこうそうなねず
 みでした。

「それにしてもよう、ずい分ぶんとあつかましいチユ
 公こうだなも」



仙せんじいさんが語かたりかけるようにつぶやくと、ね
ずみは二度三度眼にどさんどめをパチパチさせました。そして
大きな道具箱おほ どうぐばこの向むこうへ、ゆっくりとさそうように
消きえたのです。ところがどうでしょう。ねずみの逃に
げていったあとを、なにげなく眼めで追おっていた仙せんじ
いさんは、腰こしをぬかさんばかりにビックリ仰ぎょう天てん。
長老連ちやうろうれんちゆう中ちゆうをはじめ部落ぶらくの人ひとたちが、あれほど
一生いつしやうけんめいさがした鎮守ちんじゆさま様の覚書帳おほえがきちやうが、
道具箱どうぐばこの向むこう側がわに、さも申しわけなさそうに落お
ちているではありませんか。根ねがあわてものの仙せんじ
いさん、覚書帳おほえがきちやうをしつかりとふところに抱だきこ
むと、長老ちやうろうのところへころがるようにかけこみま
した。それを聞いた部落ぶらくの人ひとたちは、
「よかったなも、覚書帳おほえがきちやうが見みつかって」

「ほんと、これで秋祭りも安心してやれるでなも」
 などと、まるで盆と正月をいっしょに迎えたよ
 うに明るくなりました。
 そしてそれから仙じいさんは人に会うと、口
 ぐせのように郷倉の話をして、話に花を咲かせ
 ました。

「とつてもかわいいかしこそうなねずみだったわ
 なも。眼をパチパチさせたのはよう、きつと
 覚書帳はここにがあるよ」と教えてくれたんだ
 ぜーも。親切なねずみだがなも。部落の恩人だ
 から、これからはねずみをころさんようにして

ちよーよ
 それ以来この部落では、親切で利巧なねずみの
 恩をいつまでも忘れないよう、猫をかわなくなつ

たといわれます。
 猫もかえないほど貧しかった鹿子島部落に、今
 も伝わるお話です。

